

土着菌は粉ぬかでも粗ぬかでもいいので 100 キロの中に水を6割、すなわち 60 キロ、黒砂糖を3キロぐらい入れてください。これを山のように盛ります。黒砂糖は入れなくてもいいですが、入れたほうが、確実性があります。元菌は2つあります。孟宗竹山の下に行きますと、糸状になっている糸状菌という真っ白に立っている微生物があります。それを取ってきてください。そして、ここにその真っ白な微生物を葉っぱごと入れてみてください。4日前後して、40度、50度に上がったたら、それは間違いなく糸状



菌です。好気性の微生物ですから、40度以上で発酵し出したら、毎日1回は空気を入れてください。そして、山もり状にするとばらばら落ちていって、空気がよく入るのです。3週間ぐらいしたら、立派な茶褐色の色に変わってきます。これを日本食品分析センターで分析したところ、9割が酵母菌でした。結果、1グラムのやねだんの土着菌に950万個の微生物の酵母菌がいるという証明書をいただいて、これを全国にキロ100円で発売して宅急便で送っています。

元菌がなくて、自分でもつくってみたいという人がいたら、やねだんに電話かファクスをください。やねだんの元菌を1割入れればいいです。100キロのぬかを準備したら10キロ入れればいい。最低、50キロぐらいからスタートしてください。10キロ、20キロではボリュームがないから、乾燥して発酵しません。1回目に50キロつくって3週間後にでき上がったたら、次はこれを元菌に使えばいいから、10分の1元菌を使うわけだから、次はぬか500キロに50キロ入れたら、同じのができるのです。これをロー

ーションしていただくだけです。そうしていくと、周年つくり上げられます。

牛の場合は、朝晩食べさせたら3日目ごろからフンのにおいもほとんど変わります。豚には、飼料の1.5%ぐらい食べさせ、鶏の場合は鶏小屋にまけばいいのです。犬にうまく食わせることができれば、フンのにおいがしません。そのフンで作物をつくったら最高の堆肥、オーガニックでできているから自然と差が出ます。

それと土着菌ですが、今までの堆肥で作っていたものと差が出るのです。これは微生物の差です。玉ネギの成り込みも、元気さが全然違います。元気な土は、粒子になってきますから酸素が入っていきます。粒と粒ができるから、毛根が幾らでも伸びやすいのです。野菜でもトマトでも自然薯でもぬか土から土着菌で土をつくれれば、形の良い野菜ができるんですよ。

◆空き家対策

私たちは不の項目の解消で環境もよくなったので、今度はそれで土づくりを1年やって、無農薬、無化学肥料でコガネセンガンを植えました。それからやねだんという焼酎をつくったら、これが何と韓国に1回1,300本の輸出ですよ。集落の地域づくり・環境づくり・活性化は、まずやってみるかということで始まりました。だから私たちにしてみれば、付録のほうがものすごくいっぱいあります。

その1つが空き家です。集落が手を入れたから、昔からあったように見えるけれど、あそこまでくるには集落のお金が入っています。空き家に50万、100万かかったところもありますし、8号館は築140年なので、150万ぐらいかかりました。では、なぜ貸してくれるかというところを考えてください。持ち主は他の県に住んでいるので、いつの間にか垣根が生い茂っていたり、浮浪者が勝手に入ってきて吸い殻を置いていくこともあるのです。そんなときに「お父さん、お母さんたちのお墓の管理も私たちでしてあげるから、やねだんの力を借りなさい。ただし、改装費を集落で出すかわりに芸術家を呼ぶ迎賓館として貸してくれないか。」と、わざわざ自費を使って説得を始めていくのです。1人も、1円たりとも経費を出していません。これは集落の財源が四、五百万、毎年あるからできることです。

◆文化を語る地域をつくる

では、なぜ空き家を改修したのか。私が心がけているのは、文化を語る地域をつくること。高齢者福祉対策だけでは、やねだんは人口が間違いなく減っていく。そうやってきた時に、人口を増やさなくてもいいから、交流人口を増やそうと思ったのです。

文化集落をつくれれば、隣町のアパートで生活するよりも、やねだんで子育ての方が本物の美術も見られるし、寺子屋に行けば無料で手助けしてくれる。そうして人口が増えていく。やっと11年目に空き家を改装してアーティストを呼びましようかと放送したのです。案の定、おばちゃんは「哲ちゃんアーティストって何ね?」と言いました。今では多分、幼児から高齢者までアーティストというのは芸術家だとわかるでしょう。今、空き家は8号館まで改装してありますが、そこに7人の芸術家が来ています。地域づくりに文化を取り入れることで本当に人が動きます。

こうやって、牛小屋、精米所の跡、スーパーの土地などに作品創作所というものをギャラリー的に配置して、今は芸術街道をつくっています。回って歩いても2キロ範囲ですから、そこに自分たちがつくったお花とかの作物を無人販売で置けば、1日に100円、500円玉が入るかもしれない。入ったら、それがばあちゃんの生きがいになります。都会であろうが過疎地域であろうが、考え方はやっぱり感動だと思えます。

◆後継者育成

もう一つ大切なのは、後継者育成です。やねだんでは、それぞれの専門部に必ず行政マンを置きます。やねだんには当初役場職員が11人いました。若くても、必ず行政マンにはどこかの部長を位置づけています。私に言わせると、地域づくりで一番身近にいる助言者はだれかといったら、行政マンなのです。一番身近にいる行政マンにはお願いがしやすいのです。この人たちに、頼れる範囲で頼って自分たちでやろうよというのが、私が考えた行政に頼らないむらづくりなのです。6つの部署に5人ずつ役員がいます。そして、会計が30万円、自主財源から自主運営に30万円ずつ振っています。すな

わち、やねだんは高齢者部でも30万以上の旅行や視察に行って、足りなかったら自主活動をなさいと、こう言っているのです。

館長手当は70万円です。15年前は36万円、会計手当が6万円でした。ボランティアだけのリーダー育成では後が続かないと私は思うのです。すなわち後継者にバトンを渡すときは、それなりの手当をする。みんなが認めてくれたら、一生懸命は倍増すると思います。

◆自主財源確保

自主財源はどうしても要ります。自主財源が要るから会社と同じで、増資するから1株ずつ出資してよとやったら終わりです。だから、自主財源があればということから始まったのが芋であったり、土着菌販売であったり、焼酎であったり、そば屋であったり。今は芸術家7人の売り上げの1割をやねだんにバックさせています。やねだんに大体年間1万人位の人が視察などに来るのです。1万人も来るなんて、誰も考えていませんでした。

◆キーワードは子ども

こうやって文化や自主財源ができて、次はそれをどういうふうに使っていくかを考えました。私は自主財源を貯めていてはだめだと思っています。感動を与えるためには、やっぱり還元しないと。孤独死の心配のあるひとり暮らしの高齢者から順番に枕元にスイッチをつけてあげれば、誰かが駆け込んできて、孤独死をなくす生きた福祉をやれますよ。すなわち、他人の子供のために泣くことができるやねだんをつくらないと、文化のやねだんだけでは絶対にだめだと思うので、やねだんのキーワードは永遠に子どもなのです。

◆ボランティアに限界あり

地域づくりでのボランティアには絶対に限界があります。大事なものは、パートナーです。私の一番のパートナーはやねだんだけれども、家では家内なのです。今の館長手当は70万円ですが、後継者にバトンを渡す時はそれにプレミアムの30万円を足して100万円にしたいと思っています。そうしないと、後継者の奥さんもかわいそうだからです。